

フレンズだより



がんばる帰国生シリーズ「小学校低学年で帰国して 」より

CONTENTS

P2-3 がんばる帰国生シリーズ

「小学校低学年で帰国して~英語保持の挑戦~」

P4-5 寄稿:「ヤンゴンクーデターを経験した

高校生の私にいまできること」

P6-7 「モモちゃんとオランダ語」

P8-14 特集:「帰国して感じた"気づき"や"思い"」

P15 活動報告/代表交代の挨拶

P16 学校案内/編集後記

発 行/フレンズ 帰国生 母の会 | 〒104-0061 東京都中央区銀座 5-3-16 日動火災・熊本県共同ビル 8 階

【特集】

帰国して感じた" 気づき" や "思い"はありませんでしたか?

~フレンズスタッフ体験談と

いま振り返って思うこと~

·**·*·*

小学校低学年で帰国して ~英語保持の挑戦~

長女は小学1年生の3月に、2年8ヶ月過ごしたアフリカ南部から本帰国しました。私立中学の帰国生入試を受けた長男の進学に合わせて、母子での先行帰国でした。滞在国はポルトガル語圏でしたが、アメリカンスクールに通いましたので、学校でも、様々な国籍の友達と過ごす放課後や休日でも、英語を使用する生活でした。日本人子女の少ない地域で、日本人学校、補習授業校共になく、日本に関する行事に子女が参加する機会もなかったため、日本語を使用して学ぶ時間は自宅内に限られました。帰国時の英語の習得状況は、学校で聞く、話す事に不自由はなく、書く技能はスペルミスを全く気にせず日記や感想文を書く程度で、読書の時間は常に絵本を読んでいました。



(アメリカンスクール登校最終日にクラスメートと)

帰国後、公立小学校2年に転入しました。区内に複数ある「国際教室」の設置校で、娘も1年間入れて頂きました。クラスの英語の授業時間に教室を抜けて、専任の先生に国語や算数のフォローを受ける内容で、英語保持の対応はありませんでしたが、少人数の教室で、先生に新しい学校生活への不安をゆっくり聞いて頂ける時間でもあり、娘には有難かった様です。

帰国して初めて、娘の日本語が大分遅れてしまっている事に気付きました。ひらがな、漢字の書きが曖昧で、カタカナは全く理解していませんでした。長男が0~4才の間、日常の殆どをポルトガル語で過ごす生活を送った後に帰国したのですが、幼稚園年長への転入を経て小学校に入り、学習の遅れを感じる事無く通学できたため、娘に対しても心配していませんでした。アフリカでは日本語の絵本の読み聞かせをする程度で、書く学習が疎かになっていたため、日本の小学校での最初の1年が抜けた影響は思いの他大きかったです。

国際教室で読み書きを1年生の内容から丁寧に見て頂いたお陰で、3年生からは通常授業のみで過ごせる様になりました。

英語保持についても、娘については駐在中、あまり 対応を考えられていませんでした。いざ帰国してみる と、長男は進学先の中学校で少人数の取り出し授業が 毎日あり、現地で出来た友達とも SNS を使って英語で 交流を続ける事が出来ましたが、娘はまだ自力で SNS も使えず、アフリカ滞在中から好んで視聴していた動 画サイトを英語で観たり、英語副音声のあるアニメや ドラマをテレビで視聴する以外、英語に触れる機会が ほぼ無くなってしまいました。アメリカンスクールの お友達と親同士打ち合わせて、ビデオ通話なども試み ましたが、お互いに恥ずかしがってしまい、なかなか 会話が弾む所までは行きません。帰国当初は日本の小 学校生活に慣れる事が最優先ではありましたが、英語 の聞く・話す技能だけでも、現状を保持するにはすぐ 何か始めなくてはと焦りました。アメリカから数年前 に家族で帰国した妹に、帰国生向け英語教室(以下、K 塾)を紹介してもらい、自宅から電車で20分の距離に も校舎があったので、5月から週1回2時間のレッス ンを始めました。程なくして、同じ小学校の帰国生は 殆ど全員この教室に通っている事を知りました。

K 塾はネイティブスピーカーの先生による少人数授業で、保護者が参観できる機会はありませんでしたが、教室オリジナルのテキストや毎週出る宿題を見る限り、のんびり過ごしたアメリカンスクールの相当先を行く語彙レベルで、英語圏でしっかり学習してきたお子さんの要望にも応える内容と思われました。また、スペルや文法を確認し誤りの無い英文を書く訓練に、娘はK塾で初めて取り組みました。

娘自身には英語を保持したい強い動機が無かったため、放課後電車に乗って K 塾に通う事に慣れるだけで時間がかかり、行きたくないと泣いてお休みしてしまう事もありました。お友達に会える事を励みになんとか通室を続け、2 年生と 3 年生の夏休みは工作等の楽しいプログラムがあるデイキャンプにも参加しました。帰国から 2 年の間に、駐在時の友人家族が日本に観光に来たり、私達が友人家族に会いにアメリカへ旅する機会がありました。当時はまだ、子ども同士で話したり、旅行先での会話は問題なく出来る状況でした。

3年生の2月、コロナ対応で小学校が休校になりま した。K 塾はオンライン形式ながら開講を継続してく れたので、自宅から出られない中、週1回友達と話せ る貴重な機会でした。しかし授業内容は更に高度にな り、予習復習に相当時間が必要で、娘はこの頃から、K 塾の授業について行く事が難しくなってしまいました。 動画サイトやテレビも英語で視聴を進んでしなくなり、 映画も、観に行く時は親が英語上映を選んでいました が、「話が良く分からなかったから次は日本語で観たい」 と言う様になりました。同年は K 塾の夏休みキャンプ もオンラインとなったため、参加を見合わせました。 この辺りから英語力が低下して行った様に思います。 外出制限が厳しくても、時間には余裕があった4年生 の間に、親が K 塾の宿題をサポートしたり、娘の学習 を支える努力をもっとしていたならば、もう少し長く 英語力を保持し得たのではないかとの後悔があります。 同時期、長男はアメリカンスクールの友人の Zoom 誕生 会に出席し、会話スピードが速くてあまり輪に入れず、 これではいけないと奮起するきっかけを得ていました。 4 年生の秋から、長女も私立中学受験の検討を始めま した。帰国生入試を行う学校に受験資格を問い合わせ ると、小学1年3月に帰国した娘に資格を認める所は 都内ではごく僅かでした。「小学2年3月の帰国なら ば、まだ検討対象になったのですが…」と回答頂いた 学校が多かったです。一般入試受験準備が必須と分か った一方、K 塾では、5年生から帰国生入試対策に絞っ た授業内容に変わるとの説明を受けました。K塾での レッスンが英語保持のほぼ唯一の手段となっていまし たが、一般入試の通塾と帰国生入試対策の両立は娘に は困難だと思われ、本人にも英語継続の希望がなく、4 年生の1月にK塾を退室しました。

退室に前後して、娘は初めて英検を受けました。S-CBT 方式でも IT 慣れしている現代の小学 4 年生なら問題なく受験が出来た様で、12 月に受験した準 2 級は割と余裕を持って、3 月に受けた 2 級はギリギリで合格しました。2023 年度時点では、一般入試の科目に英語を導入している私立中学で、英検 2 級取得者は試験免除・満点扱いとなる所が多く、受験校の選択肢が少し広がりました。

5 年生の間は、少しでも英語が残ってくれる事を期待して、自宅近くの英語教室で、週1回1時間個人レッスンを受講しましたが、アメリカ人の先生が娘のレベルを判断して用意してくれたのは0xfordのGrade 3向け教材でした。6年生になると通塾が週5日に増え、

娘の要望で英会話も止め、一般入試準備に専念しました。帰国入試の受験資格を頂いた学校を算数と英語面接の2科で受験しましたが、合格しませんでした。同じ年数海外に滞在したのに、長女には、長男とは違って、学校が帰国生に期待する英語力を保持させてあげられなかったと、申し訳なく感じました。

娘は一般入試で入った中学で、春から久しぶりに英 語学習を再開します。現在は韓国のアイドルグループ が好きで、韓国語を習得したい気持ちの方が強い様で すが、中学で英語への思いを新たにしてくれるかどう か、見守りたいと思います。住み慣れた地を離れて外 国に渡り、アメリカンスクールの教室で「せんせいの いっていることがわからない。おともだちのいってい ることもわからない」と毎日泣いていた最初の1ヵ月。 小さいながら必死で英語を習得し、少しずつお友達や 生活の輪を広げて行ったその後の日々。いつの間にか、 自分の意志をはっきり言える様になっていたこと。外 見も国籍も、育って来た文化も違う学校の仲間たちと、 英語と言う共通の手段があったからこそ、当たり前に その違いを受けとめ、様々な発見をしながら交流でき たこと。帰国して日常で英語を使わない環境に戻り、 あれほど自由に話せていた筈の言葉が、抜けて行くの を止められなかったもどかしさ。全ての体験を自身の 糧として、将来活かせる日が来る様、親として願って います。



(フロリダで友人家族と再会)

幼少期を海外で過ごしたお子さんの英語保持について、 貴重な体験談をご寄稿いただきました。言語の習得と同様、帰国後の保持は子連れでの海外生活において親が最も気がかりなことの1つだと思います。この体験談は、同じ境遇の多くの方々にとって参考になるのではないでしょうか。

ミャンマークーデターを経験した高校生の私にいまできること

Yangon かるたプロジェクト 野中 優那

クーデターが起きた日

「クーデターが起きて、アウンサンスーチーさんが拘束された」父の言葉で目が覚めた。

2021年2月1日、ミャンマーでクーデターが起きた日。私は家族とミャンマーの最大都市ヤンゴンに住んでいた。聞いたことはあるけれど、一体どんなことなのか分からない。それが「クーデター」という言葉だった。前年11月に行われた選挙に不正があったと国軍が主張し、早朝アウンサンスーチー氏とNLDの幹部たちを拘束し、政権を奪取したという。ネットも電話も使えなくなるという情報が飛び交い、我が家は騒然となった。なぜならその日は、兄の大学受験の出願日だったからだ。何とか出願を終えることができたが、翌日からヤンゴンの街は様変わりしていく。

コロナ禍、厳しい外出制限下、日本では考えられないほど人流が減っていたミャンマーの街に、怒涛のように人が押し寄せ、民主主義を求めて声をあげ始めた。若者たちは、警察官に花を渡したり、歌を歌い音楽を奏でたり、ダンスをしたり、平和的にデモンストレーションをする。夜になると、人々は一斉に鍋を叩いて抗議する。私はその姿に、むしろミャンマーの人々のエネルギーを感じて高揚した。しかし無抵抗な国民に対し、国軍は催涙弾を投げ、頭を狙って発砲を始めた。夜中になると電話、インターネットなどすべての通信手段が遮断され、その間にたくさんの人々が拘束され収監される。時には死体で戻ってくることもあった。凄惨な出来事が Facebook や Twitter に次々と投稿される。通信が遮断される間に何が起きるのかを考えると夜が来るのが怖かった。

1日で、生活の全てが変わる。信じられない出来事が実際に起こるということを、私はミャンマーのクーデターによって知った。国軍の弾圧がさらに激しくなった3月、私は高校進学のために日本に帰国した。

なぜ「自分ごと」として捉えられないのか

帰国して感じたのは違和感だった。「ミャンマー帰国」と自己紹介すると、クラスメイトから「内戦している国でしょ。危ない国から帰って来られて良かったね」と声をかけられた。その言葉に、「もう日本に帰国したから関係ない」と言われているような気がした。また、彼らはミャンマーがどこにあるのかも、何語が話されているのかにも関心がなかった。まさに今、私たちと同世代の若者が自由と未来を奪われているのに、みんな無関心なことに驚い

た。でも私自身、これまでウイグル民族やアフガニスタンの問題に対し、同じように無関心だったと気付き、はっと した。誰もがいつだって、問題の当事者になり得る。

私たちは教科書で貧困や紛争を学んでいるはずなのに、 なぜそれを自分ごととして捉えられないのか。それはそ こに生きる人々の顔や息遣いが見えないからだと感じた。

「田舎の家族にご馳走したい」とお金を借りたのに、道中で花を売る子どもたちに全て渡してしまう。そんなミャンマーの人たちをたくさん知っている。彼らは暮らしの中に祈りがあり、施し合い、生きてきた。いまミャンマーで、平和のために戦っている人たちは、私たちと同じように、家族とご飯を食べたり、学校で勉強をしたり、恋をしたり。そんな、決して特別ではない平和な日常を願っている人たちだ。しかし彼らは、たとえ自分の命を失ったとしても、民主化を諦めない。なぜなら軍事政権を認めることは、夢も希望も失うことだから。

彼らの命と未来を守るために、国際社会ができること は何か。そして私ができることは何なのか。

日本の伝統文化で学びに命を吹き込む

私の知るミャンマーは、貧しいけれど、とても美しい国だった。私にできるのは、それをわかりやすく、同世代に伝えることだと思った。そのために、学びに命のストーリーを吹き込みたい。



そこで、ビルマ語を学ぶ学生とともに、かるたプロジェクトを始めた。ヤンゴンかるたプロジェクトは、14歳から25歳までのいわゆるZ世代の活動だ。日本の伝統文化であるかるたは、子どもから大人まで、あらゆる年代が気軽に楽しめる。札の多くは、私と兄弟が撮影した写真を使っている。ミャンマーで撮影した写真と短いキーワードから、人々の穏やかな日常、文化、歴史を感じ取って欲しい。

かるたには「解説本をつけたい」というこだわりがあった。写真と読み札だけではわからない背景を、写真を使い

ながら説明し、遊びながらミャンマーの歴史や現状を知ってもらう仕掛けを作ろうと思った。解説本を作るにあたって、思いがけない問題が生じた。第一に、ミャンマー語の発音をどこまで正確に日本語で表記するか。また、日本人には理解しにくい多民族国家の問題をどのくらい配慮すべきか。校正には、ビルマ語科の教授やミャンマー語翻訳家など、大変多くの方に協力していただいた。

例えば「建国の父 アウンサン将軍」という札がある。「ビルマ族にとっては英雄だが、他の民族にとっては必ずしも英雄ではない」という話を聞いた。ODA に関わるティラワ特別工業団地の札を入れるかどうかも議論になった。しかしその札を省くのではなく、あえて入れることによって、共に考えるきっかけにしたいと考えた。「夜も賑やか ヤンゴンナイトマーケット」は、クーデター後は失われた風景だ。交通量の多いストランド通りには、2019年頃から土産物屋やおしゃれなオープンテラスのレストランが次々と建設されていた。しかしクーデター後は全て撤去されてしまったという。



「うまれかわる裏路地ヤンゴンウォール」この札を撮影した場所は、ヤンゴン中心街の裏路地。以前はゴミが山のように積み重ねられ、荒れた裏路地だった。しかし大量のゴミを廃棄しアーティストが壁に絵を描いたり、遊具を置いたりしたことで、ゴミが捨てられなくなり、若者が集う憩いの場へとよみがえった。

このように、ヤンゴンかるたで伝えるのは、ミャンマーの美しい情景と人々の暮らし。文化や歴史を知ることで、異文化や多様性、SDGsや世界の問題に気付く。





未来を変えるには目の前の一人から

クーデターからちょうど一年後の2月1日まで、かるたを製作する為のクラウドファンディングを実施し、300人以上の方からご支援をいただいた。現在はかるたを用

いて、国際社会の中でについてである。それでいるではないで、小学で、小学で、の国際、地域の国際



交流施設、在日ミャンマー人の子どもの学習支援教室などで、イベントを開催してきた。4歳から74歳まで世代の異なる参加者を対象にしたイベントや、茨城、福島、ヤンゴン日本人学校の小学校6年生をつないでオンラインかるた大会をしたこともある。他にも、福岡の博多どんたくや大阪の堺水掛祭りなど、日本全国で活動を広げ始めている。



静岡雙葉高等学校の PEACE プロジェクトに参加

ミャンマーを忘れ去られた土地にしないために、分かり易く伝え、多くの方にミャンマーのファンになってもらいたい。中でも、同世代に伝えることを大切にしている。

私にはミャンマーの人々を救う力もなければ、食糧や 医療の支援を続ける資金力もない。でもイベント後に、 「いつかミャンマーに行ってみたい」「日常を知ることで、 現状が悲惨なことだとより理解できた」「ウクライナのニ ュースを見るたび、ミャンマーを思い出す」と感想を聞く

たび、目の前の一人に伝えることが未来を変える一歩だ

在日ミャンマー人や仮放免中のロヒンギャの方と出会い、これまで知らなかった日本国内の問題を知る機会も得た。知った以上、看過することはできない。当時 15 歳の私が、ミャンマーで見たこと、感じたことがある。だか

らこそ、伝えられることがあると信じて、行動していく。

とも感じる。

オランダ語との出会いがもたらした「モモちゃん」のユニークな人生の物語

今から40年近く前のことです。生まれ育った東京でひらがな、カタカナ、漢字を習い小学校生活に慣れた2年生の終わり、モモちゃんの人生は一変しました。お父さんの赴任が決まり、突然ヨーロッパの小さな国、オランダ王国のレンガの長屋で暮らすことになったからです。江戸の鎖国の時代に出島で交流のあった、あの「蘭学・蘭語」の国です。

お父さんとお母さんは、「せっかくオランダに住むのだから地元の学校に行って、地元の友達と交流しなくちゃね。」と娘をアムステルフェーンの小学校に通わせることにします。近所に別の小学校もありましたが、当時はお昼ごはんを家で食べる習慣があり、お弁当を持って通えるモンテッソーリ・スクールを選びました。



アムステルフェーンの家。長屋タイプのオランダらしいお家でした

でもね、学校に通い出してから、あらびっくり! まさか担任の先生が教室に犬を連れてきているとは ね。それに、子どもたちも先生もお腹がすくと授業 中にりんごを丸齧りするのです。日本の学校生活と は全く違いました。

弟は幼稚園生でしたから、日本人の小学生は全校生徒で一人だけ。学校初日、「後で迎えに行くからね」とお母さんはモモちゃんをポイっと教室に置いていってしまいました。それはね、お母さんは幼稚園にも弟を連れて行かないといけないから忙しかったの。先生は、お母さんと軽く会釈でサヨナラした後、モモちゃんを黒板の前に立たせました。そして黒板に文字を書きます。

「あ、これ、日本で書いた文字。私の名前だ。」

それはパスポート用に練習したモモちゃんの名前のローマ字でした。オランダ語だとアルファベットですね。席につくと、オランダ語も英語も一言も話せないモモちゃんの周りには物珍しさからか、人だかり。当時は英語も習ったことのない年齢でしたから、こうしてモモちゃんの語学デビューはオランダ語になりました。

オランダ語を学ぶ上で最初に戸惑ったのは、数の数え方でした。オランダ語のそれは日本語と違い、一の位を言ってから十の位を言います。例えば21は「エイヌン(1と)ツウィンチヒ(20)」と言います。九九は日本で覚えてから行ったので得意でしたが、先生の前で暗記するのに、答えは知っているのに数字を言えないと何度も列に並びなおしたこともありました。

楽しかった思い出の1つはランチタイム。日本の お弁当箱のおにぎりや唐揚は人気で、サンドイッチ と交換してほしいと集まる子が続出。モモちゃんは クラスでちょっとした人気者になりました。

モモちゃんのお母さんは夕食の前に毎日漢字の書き取りをしました。モモちゃんにとっては苦痛の時間、もうイヤイヤ。だって、何度も何度も同じ字を綺麗に書かないといけませんからね。上級生になり画数が増えるとさらに大変で日本のお友達が習っているスピードにはぜんぜん追いつきませんでしたが、おじいちゃまが送ってくださった、何十冊もの本を読むのを楽しみに頑張りました。日本語を忘れないように、お母さんはピアノを弾いてたくさんの童謡を歌ってくれ、また家庭ではたくさんおしゃべりするよう心がけていたそうです。





旅行で訪れた街



現地の生活に慣れると、放課後は自転車に乗って 同級生の家に毎日遊びに行くようになります。よく 行ったのはベストフレンドのお家。その子のママは フォークダンスの先生でモモちゃんもフォークダン ス教室に通いました。パパは大学の教授で、ガール フレンドと一緒に別の場所に住んでいました。普段 の日に遊びに行くときはママのお家、週末はパパの お家、そんな暗黙のルールがありました。

オランダ各地の観光に家族で出かけたり、現地の イベントに参加したり、弟との喧嘩もオランダ語で するようになっていた6年生の夏、日本への帰国が 決まりました。さあそれからは大変!冬に帰るその 日まで、週末ごとに補習校に通いますが、なんて日 本語の難しいこと。中学生になると漢字テストは0 点続き・お勉強は散々たる状態。成績はいつもぎり ぎり。

心配性のお母さんならそこで、いろいろ口を出し てたと思いますが、モモちゃんのお母さんは大らか で個性を伸ばしながら長い目で子育てしてました。 「オランダに住んでいたからね、みんなとちょっと 違ってもいいのよ。」とそんなスタンス。

帰国後3年経ったころからモモちゃんはようやく 学校の授業を理解できるようになっていきます。日 本語のヒアリングについていけるようになったので す。高校に進学し、先生の授業が楽しくなりました。 だから、モモちゃんは何事も3年すれば慣れて物に なる、といつも信じています。そこからずば抜けて 立派になるのは才能と運とタイミングが必要でしょ うけど。

大学ではしばらくオランダ語から離れて学業と体 育会系でエンジョイし、たくさんの仲間に出会い卒 業。就職活動はせず、テレビ局でアルバイトをしな がら、オランダ語を習っていた25歳の時、モモちゃ んに転機がやってきます。オランダから来日してい たバレーボール選手の通訳をしたのを皮切りに、冬 季長野オリンピックで運転手兼通訳をし、ついには オランダ大使館に就職します。日本で生活しながら オランダ語の仕事が舞い降りてきたのです。

そんな時、日本に留学中に友達になったオランダ 人が、日本で仕事をすることになり、モモちゃんは その女友達とルームシェア生活を始めます。家でも 職場でもオランダ語を話す毎日を2年ぐらい経験し ました。結婚後、産休中にオランダ語の児童書の翻 訳をしたこともありました。探してもなかなか見つ

からないマイナー言語のお仕事が、なぜか向こうか らやってくるのです。退職後しばらくして、夏季東 京オリンピックが日本に決まりました。すると、長 野オリンピックの時に一緒にお仕事をした仲間が SNS で連絡をとってきました。会議で来日するたび にアテンドし、オリンピック中は1か月テレビ局の スタッフさんと一緒に過ごしました。



長野と東京 両大会の記念リュックサック

波乱万丈ではありませんが、モモちゃんはそれな りに面白い人生を歩んでいます。これも海外生活を 経験したからだと思っています。さあ、この先、モ モちゃんはどんなおばあさんになるのでしょうか? このストーリーは今日も続いています…。

海外赴任者のバイブルといえば

海外赴任ガイド

海外赴任ガイド



各種手続き、教育、引越、 医療など出発前に知っておくべき 知識と情報を網羅!



海外出国前のお車売却

海外赴任時専門の車買取

出国直前まで乗れる!

マイルもたまる!





☆ 株式会社 JCM 本社:東京都千代田区神田錦町 3-13

クション・業販等を通じて業界に供給する会社です。

《個人情報の取扱いについて>・お客様からお預かりした個人情報は、本サービスを円滑・的確に提供するために利用し、 ご本人の了承を得すに第三者への間示・提供や自的外での利用はいたしません。 詳しくは http://www.jcmnet.co.jp/common/privacy.htm をご確認ください。 【個人情報取扱いに関する問合わせた】集JCM 流速器業部 ryutsu@cmnet.co.jp [8.2211]

帰国して感じた"気づき"や"思い"はありませんでしたか?

~ フレンズスタッフの体験談と、いま振り返って思うことをまとめてみました ~

日常生活での思いやりの心・・・幼児期

アメリカから幼児をつれて帰国

5才の長女と2才の次女を連れ、夏休みに一時帰国し ました。デパートに買い物に行った時のこと。前を行く 人がエントランスホールに入るため開けた重い押し扉 が、次女を抱いた私の目前に勢いよく閉ってきて、危う く次女の頭を直撃するところでした。とっさに出した手 でなんとか押さえましたが、すぐ後ろから来る人のこと を全く気にせず扉を閉めていくことにショックを受け、 そういえばこれが日本の文化だったと思い出し、以後、 滞在中は十分に注意するようにしました。数十センチ後 ろから入ってくる人のために扉を押さえて待ってくれる 人が、この日本にどのくらいいるのでしょうか。アメリ カではキンダーガーテンに通う子どもでさえ、後ろから 来る人が見えたらドアを押さえて待つように教えられ、 実行しています。私はその文化が好きなので、今でも直 後に来る人が見えたら、扉を手で押さえて待つようにし ています。お礼の言葉が欲しいわけではありませんが、 お互い気持ちよい時間を共有できますし、自分の心にも 余裕が生まれる気がするからです。

一足先にアメリカへ戻る夫を見送ったあと、滞在して いた夫の実家から私の実家に向かって、スーツケースを 引きながら幼い子ども2人を連れ移動し、途中、友人に会 うため、とある地下鉄の駅に降りました。ホームから改札 まではエスカレーターで上がれたのですが、その改札口 から地上に上がるためのエレベーターもエスカレーター も見当たりません。平日の昼間で周辺には人影もまばら。 助けを頼めそうな駅員さんも見当たりません。意を決し、 片手にスーツケース片手にまだ足元のおぼつかない次女 を抱っこ用ウエストポーチで抱え、5歳の長女を励ましな がら長い階段を一段一段必死に登り始めました。途中、会 社員風の男性や学生らしき女性など数人が追い越してい きましたが、見事に誰ひとり手助けを申し出てはくれま せんでした。日本にずっと暮らしていたら、そんなことは 当たり前だと思ったかもしれません。アメリカでは、特に 小さい子どもを連れた女性にはコミュニティ全体が優し かったので、こんな状況をちらっとでも見たら、きっと無 視していく人はいなかっただろうと思うと悲しい気持ち になったのを今でも思い出します。

数年後、ロサンゼルスから真夏の東京に本帰国しました。自宅に戻った翌朝、起きてきた娘たちの体中のいたるところにあせもができて真っ赤になっていました。一晩でこんな状態になるなんて、本当に驚きました。大人は長い間離れていても、生まれ育った日本の高温多湿な真夏の気候に体がすぐに順応できたようですが、乾燥したロサンゼルスで育った娘たちはそうはいかなかったようです。以来、エアコンは朝まで消せなくなりました。

娘たちには、心だけでなく体にも、日本に順応するため の時間が必要でした。



ハロウィンパーティーで

学校生活での戸惑い・・・小学校から中学校

① アジア圏から帰国

日本の学校生活をスタートした時にカルチャーショックを受ける代表例が給食です。我が家の子どもが過ごした中国の学校では、ランチは学校内のカフェテリアで大学の学生食堂のように、生徒たちはトレーを持ってレーンに並び、カフェテリアのスタッフがその日のメニューを盛り付けしてくれました。好きではないメニューがあれば、「不要(bu-yao)!」と言って、配膳を断っていたそうです。カフェテリアのランチに飽きた子、カフェテリアのメニューが口に合わない子はお弁当を持参し、一緒に食べていました。席は自由ですが、クラスのお友達と同じテーブルに集まって、それぞれが自分たちのペースで食べ始め、終わったら席を離れます。担任の先生も一緒に食べたり、デリバリーをオーダーして教室で食べたり、それぞれがランチの休憩時間を自由に過ごしていました。このような文化にいた子ども達にとっては、

日本の学校給食は驚きの連続でした。給食当番、白衣・帽子・マスクの着用、給食室からの運搬、配膳、食べ始めと終わりの挨拶、片付けなど、自由がなく多少窮屈に感じることがあったようです。しかし、この給食の時間は、子どもの成長には非常に重要な意味を持つと思います。栄養バランスが考えられた献立は子ども達の身体や健康の基礎となります。クラス全員が滞りなく揃って給食をいただけるよう、給食当番の仕事をする中で責任感、連帯感、他者への心遣いや感謝など、精神的に成長する場にもなっています。先生が給食の時間もご指導くださることで、マナーや衛生教育など食事を通しての学びがあります。そして何よりも嬉しいことは、日本の給食は美味しいということ!「給食のおかげで我が子は大きくなった」と言うご家庭も多いのではないかと思います。



現地のインター校での授業

「なんで自分たちがやらなきゃいけないの?」と、学校 生活で感じることは『掃除当番』です。海外の学校では、 清掃スタッフが教室を含めて学校施設をすべて掃除して くれます。

日本の学校では小学 1 年生から、自分たちの利用する 教室などを掃除しています。教科学習だけでは育めない、 社会性を身に付けることができ、エジプトでは「日本式教 育」として関心が高まり、一部の学校で導入されています。 給食や掃除当番、学活や日直など、日本の学校では当た り前のことですが、子どもの協調性や規律、道徳心を育む 教育として、世界から注目されることは大変誇らしいこ とです。これらの《隠れたカリキュラム》で「日本人らし さ」が育まれ、また海外で体験したことも活かしながら、 子ども達がたくさんの引き出しを持って成長することは とても良いことだと考えています。

② アメリカから帰国

生後6か月からアメリカで育った娘は、小5で帰国し、地元の公立小学校に通いました。見るもの、聞くものすべてが新鮮で、それまで一人で外を歩くことはありませんでしたが、徒歩での登下校にドキドキしながらも、少し大人になったような気持ちでいたようです。私は、心配でそっと後ろから付いて行ったりもしましたが、本人は「大丈夫!」と言うので付いていくのをやめました。しばらくすると今度は電車に乗って塾に通うようになりました。一人で電車に乗せるのは心配で、一緒に電車に乗っていきましたが、やはり本人が「大丈夫!」と言うので、送り迎えをするのはやめました。帰国後に戸惑ったのは子どもではなく、親の方だったのかもしれません。



一時帰国した時に行った入谷の朝顔市で

学校生活でも、新鮮な驚きがたくさんあったようです。背の順で並ぶこと、朝礼では整列をして並ぶこと、休め、回れ右、行進、皆が同じ動作をすることに驚いたようですが、徐々に慣れていきました。授業の体育では、教室で皆と一緒に着替えること、宿題や持ち物のチェックが毎日ありました。同じ班のクラスメイトが忘れ物をすると、自分は忘れ物をしていなくても連帯責任で、一緒に叱られてしまうことにも驚いたようです。戸惑いを覚えることは悪いことではなく、なぜそうなるかを考える良い機会となりました。

あれもこれも新鮮な驚きの中、今日はどんな声で「ただいま」と帰ってくるのか心配しながら、心配していない振りをしていました。時が経ってある日、「色々あったと思うけど、どうやって乗り越えたの?」と聞いたところ、「慣れるしかなかった」との答えが返ってきました。

慣れない生活の中、困った時に助けてくれた友人、先生、いつも優しい祖父母や親戚、皆の支えのおかげで元気に過ごせたのではないかと思います。

娘は現在、海外の方と接する機会が多い仕事をしています。どの国の方であろうと、アメリカでの経験、帰国してからの経験、それぞれの国の文化、伝統、習慣を体験できたことは、かけがえのない経験になっているようです。

さまざまな選択を経て今思うこと・・・高校、大学 アメリカから帰国

海外で過ごした経験が、いつか何らかの形として実を結 ぶことはあるのか...帰国生ならではの楽しかったことや 苦労したことをどのように整理し血肉化しているのか。 帰国後7年間、息子に対しずっと抱いてきた気持ちです。

ニューヨークへの赴任が決まったのは息子が小学校 5 年生の終わり。それは中学受験の勉強が軌道に乗ってき たころでした。1度目の赴任で幼少期をアメリカで過ごし、 日本語より早く英語を覚えた息子は、帰国後小学校に入 学しても、しばらくひとりで英語を話していました。怖い もの知らずでも通用する年齢だったこと、そのようなナ イーヴな年齢の子どもを周囲が穏やかに見守ってくれた こともあり、友達との小学校生活も楽しく、国語の点数は 伸び悩んでいたものの中学受験を意識するまで各教科の 勉強をこなすことができていました。そんな矢先の2度 目のアメリカ赴任。今にして思えば、中学受験を終え、復 学できる学校を確保してからニューヨークに行くという 選択肢もあったなあ、高校の帰国生受験や編入試験のこ とをもっと調べておけばよかったなあ、と後悔するもの です。帰国後の、大学受験を控えた高校生活は、小さなこ ろに経験したような単純なものではなかったのです。



NY の現地校

ニューヨークで通ったミドルスクールには、本校舎の脇に独立した建物があり、そこではプログレッシブな新しいプログラムを用いたクラスが設けられていました。

今では当たり前になっているタブレットを用いた教育に取り組んでおり、学校と家

でタブレットを駆使し学ぶスタイルはとても魅力あるものでした。クラスは少人数制で、グループでのディスカッションを通し問題解決を試みたり、テーマを決めて調べ物をし、自分のアイデアをプレゼンテーションしたりする時間を重視しており、伝統的な教科の学習から離れた

特色あるものでした。その学習方法に親子で共感し、息子はそのクラスに入ることになったのです。一つのテーマを掘り下げるのに専門家にインタビューする企画を自分たちで立て、その内容をまとめて発表するなど、主体的に学習できたことが楽しかったと息子は当時を振り返っています。また、小さなクラスということで、学年を超えた友人や先生方と密な関係を築くことができたことも、かけがえのない経験になっているそうです。

ハイスクールを意識するようになったころ、このまま進学し帰国時に日本の高校へ編入するか、タイミングよく高校入試に合わせて母子だけで帰国するかの選択を迫られ、随分悩んだことを思い出します。高校入試だと学校選択が広がると思い、ハイスクールへの進学をあきらめ、気持ちを切り替えて帰国生受験の勉強に励みました。無事本人の第一志望校に入学することができ、夢を抱いた新生活が始まったのです。

ところが、本人は毎日疲れた生気のない様子で、夜に部 屋を覗いても机で居眠りをしていることが多くなりまし た。高校1年生といえども進学校では立派な大学受験生。 受験勉強に対する同級生や先生方の意識も高く、完全に 気持ちがついていけなかったのだそうです。その根底に は、日本の勉強の仕方に対する戸惑いや反発する気持ち がありました。自分の勉強方法の修正がうまくできない まま、手探りで進んでいったのです。息子は、「アメリカ の学校ではクイズという小テストが度々あり、点数を頻 繁に可視化することで勉強の方向性を精査できたけれど、 日本は半年に一度の試験しかなく、勉強の方向性があっ ているのか間違っているのかに気付けない。間違ってい たと気がついても時間が経ってしまっている。それに加 えて授業の進度も早く、問題へのアプローチも独特のコ ツが必要で、それらを自分でつかみ軌道に乗るまでとて も苦労した」と自分なりの分析を話してくれました。

そして勉強以上に苦しんだのが周囲との関係だったそうです。思春期でもあり反抗期でもあり、受験のプレッシャーがかかる年齢でもあります。アメリカ帰りの発言の多い息子は異質な存在だったのかもしれません。当初、本人の過剰な意識もあったことでしょう。最終的には打ち解けて友人もできましたが、違和感を持ちながら生活した時間は長く続き、寂しかったようです。

現在大学生活を謳歌している彼は、高校時代を振り返り、良い経験だったと前向きにとらえています。理系に進むと、当時独特と思われた問題へのアプローチの仕方が応用できることを発見したり、人間関係においては、周囲の状況をよく見ながら自分を出したり協調したりするバ

ランス感覚を上手く使ったり、まだまだ発展途中ながら も過去の経験から学ぼうとしているのだそうです。その ように話す息子の姿を見て、その時々の選択が間違って いなかったのだと納得しようと決心することができまし た。一人の子どもの小さな個人的な体験ですが、そこから 得たものを少しでも役立ててほしいと願っています。

日々の生活の中で感じたこと

ヨーロッパ・オセアニアから帰国

欧米やオセアニアなどでは気さくな人が多く、見知ら ぬ人と道ですれ違う際にも目が合えば「ハ~イ!」とあ いさつしていました。

また、スーパーマーケットや小売店でも店員さんと「今日は天気が良いわね」とか、「おいしそうな果物ね」とか、必ずと言ってよいほど笑顔で会話をする癖がついていたので、帰国後、道ですれ違う人に思わず笑顔を向けたら、けげんな顔をされてしまいました。また花屋に苗を買いに行ったとき、店の人に「良い苗ですねえ。きれいな花が咲きそう」などと気さくに笑顔で話しかけた時も、相手が驚いているのを感じました。それ以後、海外にいた時のような笑顔の挨拶をしないように心がけた結果、スムーズに暮らせています。みんながもっ



ベルギーのスーパーマーケットで

と笑顔で挨拶するようになれば、日本はもっと明るくな るのに・・・と思います。

日本に住んでいたときはまったく感じなかったのですが、帰国後、駅のアナウンスがうるさすぎると感じました。「駆け込み乗車はおやめください」「ホームの端を歩かないでください」など注意を促すものや、駅ごとに違うメロディーが流れていたり、なぜか鳥のさえずりのような音がしていたり、とにかくあちこちからいろいろな音が聞こえて来るのがとても気になりました。

欧米など海外の駅は、むしろ不親切なくらい構内アナ

ウンスはありません。行き先を知らせるパネルを自分で確認して、遅れないようにホームに向かうことに慣れていたので、久しぶりの日本の駅では、たくさんの音に疲れてしまいました。



ハリーポッターでお馴染みのSt Pancras 駅

また、お年寄りや小さな子に席を譲る人が少ないことにも驚きました。アメリカやニュージーランドでは、皆が進んで席を譲っていたのを思い出します。日本も席を譲ってくれる若者が増えてきましたが、まだまだだなと感じることが多いです。

かつて帰国生だったご本人が、子どもの頃を振り返って くれました

① 1970年代にアメリカから帰国した時、学校生活で 印象に残ったエピソード

物心ついた時には既に海外で暮らしていた私にとって 日本への「帰国」は、むしろ「初めていく国」でした。 アメリカの小学校から日本の公立小学校に転校した時の 数々の体験は今でも鮮明に覚えています。海外駐在員の 社宅がいくつもある地域だったので帰国子女受入れ校で あったその小学校には多くの帰国子女が転入していまし た。どの子が帰国子女か、すぐに分かりました。「ドイ ツ」「ブラジル」「サンパウロ」「フィリピン」「チャイ ナ」というように滞在国のあだ名がついていたからで す。私も危うく「アメリカ」というあだ名がつくところ でしたが、運よく逃れることができました。帰国子女で あるというだけで学校中から注目され、暫くかなり緊張 しながら学校へ通っていた記憶があります。

まず一番に困ったのは日本語がうまく話せないことで した。それは深刻で大きな問題ではありましたが、精神 的に大変だったとは捉えていません。言葉が出来なくて もコミュニケーション力はあったので友達にも恵まれ、 楽しい学校生活を送ることができました。むしろ、生活 習慣の違いに戸惑いました。

例えば、トイレ事情について。今でこそ日本のトイレ は世界の中でも一番を争うほど近代的で衛生的ですが、 私が帰国した70年代のその公立小学校のトイレはかな り古く、和式でした。生まれてから一度も和式のトイレ を使ったことがなかった私にとって、しゃがんで用を足 すという姿勢は苦痛でした。しかもトイレの臭いに耐え 切れず、いつも鼻をつまみながら片手で操作していたの で尚更大変でした。次第に学校でトイレに行かず我慢す るようになり、走って下校したものです。このことを知 った担任の先生は休憩時間に私を見つけてはそっと新校 舎にある洋式のトイレを使わせてくれました。やがて高 学年に進級すると新校舎に移り、学年全員が洋式トイレ を使えるようになり一件落着。帰国当初、私が学校のト イレに行けずにいる事態を心配し、先生方は職員会議で 日々話し合っていたそうです。卒業する際に当時担任だ った先生から明かされ、先生方が真剣に私のことを心配 して下さっていたこと、そしてさりげなく対処してくだ さったことに感謝の気持ちでいっぱいになりました。

他には学校の上履きの脱ぎ履きについて。アメリカで 購入した紐靴を履いて登校していたので、昇降口で素早 く上履きに履き替えることができませんでした。靴の脱 ぎ履きは一日に何回もあります。朝礼や昼休み、出遅れ ると友達と一緒に校庭の遊具で遊べないし、避難訓練や 体育の授業では先生に叱られます。今日は脱ぎ履きがな いと安心していると、図工の授業で外の風景を描くため に校庭に集まりなさいと言われる。皆の素早い動作につ いていけず昇降口で「すのこ」の端で紐を結んでいると どんどんみじめな気持ちになっていきました。母に皆が 履いている「ズック」(今でいうスリップオン)を履き たいと懇願し、しぶしぶ買ってもらいました。

お気に入りの洋服も当時の髪型も「アメリカ流」だと冷やかされ、恥ずかしさと共に望まない注目に困惑していました。「皆が着ているような薄手で透けているカーディガンを羽織りたい」「皆がしているように前髪を作って段カットの髪型にしたい」母に懇願しましたが許してもらえませんでした。また遠足や登校の際に被る学帽も帰国当初、同一の物を身に纏うことを嫌い被らなかった私でしたが、私だけが被らず写ったクラス写真を見て、その後二度と学帽を忘れることはありませんでした。装いだけでなく、態度も変化していきました。授業中に分からないことがあれば躊躇なく手を挙げて質問をしていた私も、やがて手を挙げることを殆どしなくなりました。中学に進級すると制服があるので周囲にとやか

く言われることはありません。昇降口での素早い動作も板についてきました。同じ体操服を着ることに対しても慣れてきました。私はすっかりカメレオンのように周囲に同化していきました。別の小学校から上がってきた人達に自分が帰国子女であることを隠していたのも東の間、英語の授業で気付かれてしまいました。「発音が外国人みたいで聞き取れない」と言われ、わざとカタカナ英語の発音で朗読しました。授業参観での母の悲しそうな顔を今でも覚えています。

そのようにして私は自分の個性を消していきました。 特にそれが良いとか悪いとか意識はなく、ただ必死に周 囲に溶け込み、難なく学生生活を過ごしたいという一心 で出た行動だったと思います。見た目は日本人であって も心は皆とはちょっと違うと自覚していたからかもしれ ません。

30年後の同窓会で「チャイナ」君と再会し、どの都市 に住んでいたのか改めて聞いたところ、実は中国でも台 湾でもなく、韓国だったことが判明。苦い思い出も時を 経て笑い話になった瞬間でした。



帰国後の担任の先生とプライベートで行った動物園で

② 1980年代、小学校高学年でドイツから帰国して感じたこと

今から40年ほど前、ドイツ滞在を終えて日本に帰国 した小学校高学年の私は、夜も光輝く東京の街に驚きな がら、成田空港からの道をたどったことを思い出しま す。日本の小学校生活で戸惑ったことは、まず上履きに 履き替えることです。冬寒いドイツでは外履きを履き替 えることはなく足全体を包む靴を履いていたので、早速 しもやけになり授業中足をモゾモゾ動かしていました。

それから同級生から「これドイツ製?」とよく聞かれていました。珍しいものではなかったのですが、両親が選んでくれたものであり質問されることが嫌だったことを覚えています。



ドイツの日本人学校入学式

また、帰国したのが小学校高学年だったのもあり私は ランドセルを使用することがなかったのですが、我が子 が小学生になるとランドセルの重さに驚きました。現在 のランドセルの重さは平均11~13kgで、特に低学年の こどもにとっては重さを感じると思います。ここ数年学 ぶ教科が増えたことで、教科書自体やページ数も増して いる上に、体操着、水筒をいれると一杯になります。日 によっては上履きや鍵盤ハーモニカを別の袋で持ってい ったり、図書館で借りた本を持ち帰ってきます。海外の 日本人学校でもやはり日本のランドセルを背負いたいと 思う親子も多いようですが、私はドイツの日本人学校に 通学していた時、リュックサックを使用していました。 リュックでも四角の枠が入っており自立するタイプで、 片手でひょいと負担なく持てる重さでした。それに教科 書やお弁当、絵の具、音楽の時間に使うリコーダー等全 て入れて持っていっていました。オレンジ色に黄色の枠 だったと記憶していますが、冬の日照時間が短いドイツ では、暗い場所でも目立つよう派手な色で、反射板もた くさん付いているリュックサックが多いようです。日本 でもアウトドアブランドが販売しているランドセルは軽 量、安価で水濡れに強いナイロン素材が評判となってい ます。富山県の自治体では、経済的に購入が難しい家庭 への配慮もあり、新入生全員にこのランドセルを贈って いるとのことです。子どもの身体の成長や扱いやすさを 考えたときに、重さや容量の点で合理的なドイツのリュ ックサックを懐かしく思い出します。

その後、私は中学で帰国生がいる学校に通うことになり、 クラスメートと帰国後に驚いたことを話すと、友人は「体育の時間に馬跳びをする」ことを話してくれて笑いあったことがあります。同時に「自分だけではないんだ」という安心感も大きくなりました。また、授業中に滞在していた国について調べ発表する時間があり、文化や生活習慣 の違いなどを知ってもらう機会となりました。私は地図を見てもらい、ライン川にかかる橋を渡って日本人学校に通っていたこと、ドイツのクリスマスや大晦日の花火など楽しかった思い出を紹介しました。今思うと、在校生にとっては世界に向けて興味関心が高まり、ネットで調べるだけではない生きた知識となります。そして多様な価値観を受け入れ共生していこうとする姿勢は、未来を生きる力の十台となるのではないかと思うのです。

コロナ禍のアメリカから帰国し、幼稚園の卒園対策委員を担当した経験から

渡米時 0 歳だった長男は 10 歳、その間に生まれた次 男はキンダー入学を前に、10 年ぶりに 2022 年日本に帰 国することになりました。突然の日本帰国で、私の心配 は 10 年間のアメリカ生活ですっかりアメリカ人になっ てしまった長男のことばかりでした。

彼は嫌々日本に帰国したこともあり、日本の学校には 絶対に行きたくないと言っていたので、インターや近所 のオルタナティブスクール、帰国子女受入校など、いつ でも動ける体制を整えて、公立校に転入しました。

初日、私の後ろに隠れて校門をくぐった長男でしたが、教室に入ると拍手で迎えられ、迎えに行くと、早々に沢山の友達と下校したと伝えられ、心配していた学校生活や40分の徒歩通学に初日から彼はスムーズに順応しました。本人の適応能力もさることながら、どんな環境でも、お友達や先生に勝るものはないと実感させられました。

一方キンダー入学を前に帰国した次男は、まだ小さい しどうとでもなるだろうと思っていたところ、大自然の 中でワイルドに育って来た彼は、初日の東京の喧騒に戸 惑いを感じたようです。主人の希望で私の地元である湘 南に住まいを設けていた選択に、心底ホッとしました。

近くの幼稚園では今すぐの受入れは不可との事で、毎日公園集合・解散で、裸足に半袖短パンで通い、田んぼ、畑、野山に海に、自然の中で毎日朝から晩まで遊び尽くす自由保育のところに通い始めました。しかし1ヶ月程すると近所の幼稚園から突然入園許可がおり、悩んだ末に転園することにしました。

自然保育とは全く違う幼稚園の生活に、ワイルドな彼 が適応していけるのか、不安も多々ありましたが、度重 なる環境の変化で初めは戸惑ったものの、2週間もする と歌やお祈りも覚え、幼稚園が大好きになりました。

対する私は、転園先で期待していた自然保育の親たちのような"自然の中でのびのび子育て""大人たち皆で

子ども達を育てていこう"というオープンでウェルカム な関係を見つけられずにいました。

夏休みを終えるとすぐに、卒園に向けての係決めが始まり、皆さん様々な事情を抱えており、入園して間もない私が、リーダーを引き受けることになりました。初日のミーティングの最後に、運動会に向けて、有志でお揃いのTシャツを作ろうという話が持ち上がり、時間のない中で意見の食い違いや仲間割れが勃発し、すごいところに入ってしまったなというのが最初の印象でした。それでも、一人ひとりに話を聞いていく中で、このコロナ禍でグループでの行動が主になってしまっていること、皆で話し合う機会が減ってしまっていたことが分かりました。

ならば、先入観のない私が先頭に立って、子ども達を 含め、皆に声掛けをして、卒園のために、何かをしたい という思いで集まった仲間たちの想いを纏めていくこと が、自分に出来ることなのかなと思い、卒園係を再スタ ートさせました。なかなか意見が出にくい日本人なの で、私の意見を述べた上で、Yes/Noでアンケートを実施 し、それに対しての意見や質問も受け付けるといった形 式で進めていきました。「例年」にとらわれがちな幼稚 園社会ですが、私達の想いや色を大切に進めました。そ の中で、沢山のことを変えていくことが出来ました。

例えば、幼稚園の寄贈品を消耗品ではなく、ずっと残る手作り感のあるものにしたいということで、園の教会をモチーフにオリジナルの掛時計を作成しました。卒園記念品として、毎年続いていたアルバムの作成をやめ、代わりに思い出の写真で図書カードを作成し、好きな学用品や本を買っていただくということにしました。また携帯から気軽に参加出来る動画のメッセージを全員から集め、卒園記念ムービーを作成しました。今まで手書きで行ってきた先生方への色紙は、オンラインに切り替え、退園した子ども達にも参加して貰いました。卒園式では個人でのビデオ撮影が出来ず、毎年代表者の善意で撮影や手作りの編集が行われていたのをやめ、安く扱ってくれる業者さんに当日の撮影から編集まで依頼し、卒園式のDVDを作成しました。

オンラインの動画や色紙は、私がコロナ禍のアメリカで得てきたものですが、時代と共に働く母親も増えており、やはり労力や負担をできるだけ減らして、更に良いものを作るというのが今の時代には合っているのかなと思います。そうすることで、大変なイメージの係をやりたいと思える人が増え、更に仕事が軽減されるだけでなく、子ども達のために関わりたいと思う親が活躍できる

機会が少しでも増えるのではないかなとも思います。

お世話になった園に少しでも貢献できたこと、また今 回の係を通じて皆の輪に自然と入って行けたことはとて も良かったです。様々な考えを一つに纏めていくことの 大変さも実感しましたが、やはり、コミュニケーション が一番大切、ということも学びました。こうして一つひ とつ乗り越えて、皆の協力で、重要な係を無事に終えら れたことにも感謝しています。

最後のDVD 作成費の集金も、定額で払う人、お釣りを献金に回す人、作成しない人、の3パターンに分けて行い、それぞれの意思を尊重する形を取れたのも良かったです。これも初めての試みでしたが、"みんな一緒"が尊重される日本で、それぞれの意思を尊重した、"みんな違ってみんな良い"という文化を、こうした小さなことから広めていければいいなと思っています。

初めての日本での子育ては、どうなるのか本当に未知 でした。小さなことを数えれば、毎日が驚きの連続の日



次男の卒園式



~ 皆、戸惑いの中から学び、異文化と比較しながら日本 の良いところを受け入れているようです ~



フレンズ 帰国生 母の会 2022 年度活動報告 (2022/4/1~2023/3/31)

- 1. 海外赴任に関する相談、問い合わせ
 - ① 電話による相談:15件 ② メールによる相談:21件 ③ 面談による相談:6件
- 2. 賛助企業依頼による海外赴任前セミナー
 - ① 個別面談 (Web) 117件 ② 個別相談 (メール) 2件 ③ 講義 (Web) 1件
- 3. 『母親が歩いて見た帰国生のための学校案内 2023-首都圏版 中学・高校編』2022 年 9 月発行 取り上げた小学校・中学校・中等教育学校・高等学校・高等専門学校:約 320 校 発行部数 800 部
- 4. 機関誌『フレンズだより』 78 号 (6 月発行)、79 号 (12 月発行) 各 1500 部 主な配布先: 賛助企業、文部科学省、公益財団法人海外子女教育振興財団、海外全日制日本人学校/ 補習授業校、首都圏の小学校・中学校・高等学校、教育関係機関、諸団体、国内・海外定期購読者、来訪者、他

5. 勉強会

・海外子女教育専門相談員連絡協議会定例会及びWEB相談員連絡会 参加・報告

6. 対外活動

- ・海外子女教育専門相談員連絡協議会にメンバーとして参加
- ・文部科学省「在外教育施設派遣教師研修会」にて講義 (Web)「保護者の期待する日本人学校・補習授業校」
- ・賛助企業依頼による海外赴任前セミナー(主に Web)
- ・寄稿:『海外赴任ガイド』「母たちの海外体験談」他(株式会社 J C M 発行)、『月刊グローバル経営』 「Plaza海外生活」(一般社団法人日本在外企業協会発行)、『週刊 N Y 生活』「教育なんでも相談室」 (ニューヨーク生活プレス社発行)、『帰国便利帳』(Y's Publishing Co., Inc. 発行) 他

協力:公益財団法人海外子女教育振興財団 帰国生のための学校説明会参加(WEB 開催)

7. 来訪、お問い合わせ、取材を受けた団体・企業・学校(順不同)

公益財団法人海外子女教育振興財団、株式会社 J C M、株式会社早稲田アカデミー、Y's Publishing Co., Inc.、株式会社アイウエア (JOBA)、一般社団法人日本在外企業協会、グローバル化社会の教育研究会(EGS)、N P O法人海外安全・危機管理の会、KempoTV 他

8. 『母親が歩いて見た帰国生のための学校案内 2023』にご協力いただいた団体・企業(順不同) 公益財団法人海外子女教育振興財団、プチポア(ベルギー)、タイランドハイパーリンクス、 Mix B (12 都市)、ニューヨーク生活プレス社、株式会社 J C M、Y's Publishing Co., Inc.

2022 年度賛助企業 (順不同)

東京海上日動火災保険株式会社、キヤノン株式会社、本田技研工業株式会社、株式会社ブリヂストン、株式会社JCM、花王株式会社、日清食品ホールディングス株式会社、日本製鉄株式会社、株式会社リロケーション・インターナショナル

2022 年度機関誌『フレンズだより』広告掲載企業(順不同)

株式会社JCM

『母親が歩いて見た帰国生のための学校案内 2023』広告掲載団体・企業・学校(順不同)

公益財団法人 海外子女教育振興財団、SAPIX国際教育センター、国際基督教大学高等学校、 東京都市大学付属中学校・高等学校、富士見丘中学高等学校、有限会社 レオ、大妻多摩中学高等学校、 大妻中野中学校・高等学校、海城中学高等学校、湘南白百合学園中学・高等学校、 東邦大学付属東邦中学校・高等学校

皆様のご支援に厚く御礼申し上げます。

フレンズ掲示板



母親が歩いて見た 帰国生のための学校案内

首都圏版 中学・高校編 価格 国内:3,740円(税・送料込) 海外:3,400円(送料



2023年9月18日発行 HPにて予約受付中

Amazon、全国書店でもご購入可能です。

インスタ始めました!フォロー、共有よろしくお願いします。

ID: friends kikokusei hahanokai



スタッフ募集中!

ご希望の曜日に週1回、銀座のオフィスで一緒に活動してくださる仲間を募集しています。

活動時間:月~金 10:30~16:30 ご都合に合わせ、在宅ワークと組み合わせての活動も可能です。

- *交通費実費、昼食代補助支給
- *③を中心にご協力いただくネットワーク会員も同時募集!(登録制。不定期の活動)

【主な活動内容】

- ①年に一度発行「帰国生のための学校案内」制作。学校訪問&訪問記の執筆。
- ②協力企業・団体の依頼によりエピソードや体験談を執筆。
- ③赴任前、帰国後相談(主に Zoom オンラインにて実施)。



↑↑↑ お申込み、お問い合わせ はこちらから

代表交代 ~挨拶~

在任中の 4 年間、支えてくださった皆さま、スタッフ、ネットワーク会員の皆さんに心から御礼申し上げます。ありがとう ございました。こうして代表のバトンを繋げることに安堵しています。どんな場面でも不安を感じなかったのは、スタッフ同 士がいつも対話しているからなのかもしれません。時代は変化し、価値観も多様になるいま、学校訪問でお会いする先 生、生徒の皆さんのお話に励まされ、未来は決して暗いものではないと感じます。新代表のもと、子どもたちの明るい未 来を願い活動して参ります。これからもどうかフレンズをよろしくお願いいたします。

【旧代表:池谷 明子】

この度、代表の任を引き継ぐこととなり、この重責に身の引き締まる思いでおります。世の中の状況は変化し、インターネットを通じて情報を簡単に得られるようになりました。私たちの活動もこの変化に追従していかなければなりません。海外での生活や子育て、帰国受験などを体験した私たちにこそできることを模索してまいります。これまでも多くの方々のお力添えをいただいて活動してまいり、感謝に堪えません。少しでも皆様のお役に立てるようスタッフとともに研鑽を積み、活動してまいります。今後も、ご指導、ご支援の程、よろしくお願いいたします。

【新代表:西地 佐和子】

編集後記

フレンズは 40 周年を迎えました。ネットや SNS の普及に加え、この度のパンデミックによってオンライン環境の整備が進みました。一方、我々にいただくご相談内容には、昔と変わらない不安や疑問があると感じ、我々の活動を通し、まだまだ同じ境遇の方々のお役に立てることがあるのだと感じます。今後もたくさんある情報源の1つとして、有益な内容を提供できるような活動をしていきたいと思います。

次号の「フレンズだより」は40周年記念号をお届けします。お楽しみに!

発行/フレンズ 帰国生 母の会

〒104-0061 東京都中央区銀座 5-3-16 日動火災・熊本県共同ビル8階

TEL 03 (6633) 4096 FAX 03 (3573) 1217 Email:fkikoku@gaea.ocn.ne.jp